

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

民族学博物館の危機：機関研究：
「マテリアリティの人間学」領域 モノの崇拜：
所有・収集・表象研究の新展開（2009-2012）

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹沢, 尚一郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5588

機関研究 ● 「マテリアリティの人間学」領域
モノの崇拜：所有・収集・表象研究の新展開（2009-2012）



モノのもつ美的側面が強調されたパリのケ・ブランリー美術館の展示（2013年1月）。

21世紀の民族学博物館、あるいは民族学博物館の危機

博物館とはいうまでもなくモノを展示する空間である。美術館であれば、絵画や彫刻などの美術品をホワイトボードに並べて置くのが普通だし、民族学博物館であれば、遠い異国の人びとのもちいる道具や宗教的祭具、衣服などを展示することになっている。

「博物館の時代」といわれた19世紀を通じて、民族の展示はくり返し開催された万国博覧会の目玉のひとつであった。そこには異文化への憧憬や、西洋の拡張の実証、植民地支配の正当化などの要因があったことが確認されているが、それらの要因がすべて失われた21世紀にもなお、異文化展示を主目的とする民族学博物館は存続しうるのか。それは今日、自己の存在の正当化のためにいかなる言説と実践を生み出すことが求められているのか。

2013年1月15、16日にパリの人間科学館でシンポジウムを開催したのは、こうした問題関心からであった。全体のテーマは「21世紀の民族学博物館」。発表者は、大英博物館、アムステルダム熱帯博物館、ウィーン民族学博物館、ジュネーブ民族誌博物館（紙面参加）、パリ自然史博物館、トゥールーズ自然史博物館、人間科学館、フランス国立科学研究センターからの参加者に私を加えた9名であった。さらに、パリのケ・ブランリー美術館や人類博物館、社会科学高等研究院の研究者や大学院生も参加して、熱のこもった討議がおこなわれた。

そこで何が問われ、何が明らかにされたのか。提起された事項は多岐にわたるが、いずれも民族学博物館が抱える今日的課題と将来の可能性／不可能性の指摘に焦点があてられていた。その多くは民族学博物館のみならず、民族学／人類学

という学問のあり方そのものにも関わることなので、主要な点について紹介していこう。

民族学博物館が直面する困難と価値低下

ヨーロッパ各地の民族学博物館が、日本で想像していた以上の困難に直面していることが多くの発表で提起された。オランダにはこれまでアムステルダム、ロッテルダム、ライデンの三つの民族学博物館が存在していたが、それらをすべて統合すること、しかもロッテルダムの民族学博物館の所蔵品はすべて売却することが、2012年に政府によって決定された。ウィーン民族学博物館は、2008年に美術館組織の一部として統合されたことで、独自の展示を実施することがいじめるしく困難になっている。ジュネーブ民族誌博物館も事態はおなじであり、現在進行中の建物と展示のリニューアルに対し、市議員の一部から「市民に評価されていない民族誌博物館に多大な資金投入が必要なのか」という異議が出されて、館長ポリ

ス・ワスチオが公聴会への出席を求められた。そのことが、同氏がシンポジウムへの出席を急遽とりやめた理由であった。

こうした民族誌博物館に対する低い評価は、2002年にパリの人類博物館が一時閉鎖され、その民族学コレクションがケ・ブランリー美術館に移管されたことに端を発したといっよい。人類博物館は1937年にマルセル・モースらの手で開設されて以来、フランスのみならず世界の人類学／民族学をリードしてきた。しかし、自然史博物館の一部とされていたために、予算も十分には配分されず、研究者の数もかぎられており（わずか3の教授職）、自己改革を実現できないまま時代の潮流から取り残されたのだった。

一方、「未開美術」に対する造詣を自負するシラク大統領（当時）は、その所蔵と展示のための施設を新たに設置することを決定し、人類博物館の一時閉鎖とそのコレクションの移管を強行した。この施設は、エッフェル塔のとなりという地理的利便性に加え、著名な建築家を活用した「斬新」なデザインと、莫大な資金の投下による展示の洗練により来館者の増大に成功し（開館以来年間約150万人の来館者）、人類学の外部では一種の「サクセス・ストーリー」として受け止められている。

おそらくそうした経過が、フランスのみならず、他国でも広く受容されたことで、民族学博物館の統合や組織移管が各地で開始されたのであろう。もちろん人類学者はそうした逆風に対して、声をそろえて反撃することが必要なはずだが、それでは何をなすべきか。

アート／アーティファクト、民族学博物館／美術館の関係

ケ・ブランリー美術館が観客動員の点で成功をおさめたの

は事実だとしても、他方で多くの批判が生じているのは疑いない。それはアジア・アフリカ・オセアニア・アメリカの無文字社会の「美術品」を常設展示するための施設とされるが、そこでは「伝統的」な仮面や彫像のみが展示され、現代アーティストの作品は排除されている。さらに、当該の社会のなかでそれらの作品がどのように生きられ、価値づけられているかの説明がまったくなく、きわめて恣意的で西洋中心主義的なアート概念の管理下に置かれているのである。

これに対し、民族学博物館でもアート作品が展示されていないわけではない。現代アフリカのアーティストの作品が15-19世紀のベニンのブロンズ像の脇に置かれている大英博物館のアフリカン・ギャラリーをはじめとして、現代アートの展示は、世界の諸社会の現在と生活の多様性を展示することを目的とする民族学博物館の不可欠の要素になっている。それらは色彩や形象の力強さによって来館者に大きなインパクトを与えることができるだけでなく、匿名で集成的で画一的な展示という民族学博物館に寄せられる批判とは異なる、名前をもち個性的で能動的な主体のあり方を示すことができるためである。

それにしても、これらの作品に接しうる民族学博物館の来館者の少なさと、美術館の来館者の多さととの対比をどのように説明したらよいか。「科学」や「文化展示」の錦の御旗を振り回すだけでは十分ではないことは、上に述べた民族学博物館の困難が示すとおりだ。民族学博物館の新たな存在証明と広報活動が何より必要ははずなのだ。

総合の学としての人類博物館は今なお可能か

1937年に開設されたパリの人類博物館は、総合の学としての人類学を体現したものであった。その設立にあたったのは、医師で先史学者のポール・リヴェ、民族学のマルセル・モース、考古学のルロワ・グーランらであり、その展示も、形質人類学、先史考古学、民族学の三者を総合するものであった。ところが、そのうちの民族学部門の資料がケ・ブランリー美術館に移管されたことによって、人類博物館の総合展示は幕となった。先史学・形質人類学部門は新たな人類博物館として再生することになっているが、当初、民族学の関係資料も展示するとされていたマルセイユの地中海文明博物館の設立に、人類学者は一切関与していない。フランスにはもはや国立の民族学博物館は存在しないのだ。



フランスでのシンポジウムでは白熱した議論が展開された（2013年1月）。



民族学的なモノと現代アートの作品が並べて展示されている大英博物館のアフリカン・ギャラリー（2010年3月）。

こうした事態が、ただちに学問としての人類学の趨勢に影響を与えるものではないかもしれない。とはいえ、そこにはいかなる関連性もないと断定するのは早計であろう。

交流と接触のハブとしての民族学博物館の可能性

国立民族学博物館の歴史と活動内容を説明したときに、他の博物館の館員からもっとも高く評価されたのは、毎年組織している数十の国際シンポジウムや共同研究であり、外国人キュレーターを招いて実施している博物館研修の充実であった。もちろんこれらの事業は、研究者60名を擁する本館だからこそ実現できるものであり、そのことに対して他館から羨望の声があがったのだ。

一般的にいってヨーロッパ諸国では、博物館は教育施設として位置づけられており、館長の多くは行政官がつとめ、博物館勤務者はキュレーターとして大学との交流が制限されるなど、アカデミック・コミュニティから排除されている。シンポジウムでは、本館を見習ってアカデミックな交流のチャンネルを増やしていくべきだという意見が数多く出されており、民族学博物館が研究と教育のハブとして機能することは、今後の民族学博物館の可能性のひとつとして再確認されている。

人類学では近年モノに対する関心が増大しており、英国では「マテリアリティの人類学」が提唱されるほどなのに、世界各地のモノに直接ふれうる場としての民族学博物館に対する評価の低下をどう説明すべきなのか。民族学博物館は、世界の文化の多様性を示すという以外の、新たな経験の創造の場であることが求められているのではないか。それを探すためにも、21世紀における民族学博物館の使命を問い直す今回のシンポジウムのような機会を多くもつことの必要性が最後に確認されたのだ。

たけざわ しょういちろう

国立民族学博物館先端人類科学研究部教授。機関研究「モノの崇拝：所有・収集・表象研究の新展開」研究プロジェクト代表。この研究プロジェクトの一環として、2013年1月にパリでシンポジウムを実施。その成果は、フランスの研究誌 *Techniques & Culture* で特集を組むことが決定されている。